化粧行為によってもたらされる ASD 女性の生きづらさに関する調査研究

－化粧意識構築プロセスへの着目－

要旨

北九州市立大学大学院

社会システム研究科地域コミュニティ専攻

2023M30006　森京花

1.　社会背景

現在の日本では、多様な人々が生きやすい共生社会の実現が目指されている。しかし、精神疾患や神経発達症を抱える人々の生きづらさは依然として大きな課題である。特に自閉スペクトラム症（ASD）女性はメンタルヘルスや社会適応の問題が深刻であり、ASD 男性とは異なる困難を抱えながら生活を送っている。

2. 先行研究

ASD 者は対人関係の問題や慢性的な不安感を抱えやすく、女性の ASD 者は社会適応しようとする社会的カモフラージュが、返って彼女たちの精神的負担を増幅させやすいことが示されている。また、化粧は対人関係を円滑にし、自己満足や気分の向上をもたらすとされる。先行研究では ASD 女性の身だしなみの支援の構築が課題であると示されており、彼女たちの主観的世界の中での認識を明らかにすることは肝要である。しかし、女性が主体的に日常的に行うとされる化粧について、ASD 女性が化粧をどのように捉え、その影響を受けているかについての実証的研究は不足している。

2.　学術上の問いと目的

本研究は、ASD の女性に対する研究が蓄積されていく昨今において、彼女たちに対する支援の 1 つとして目指されるようになった身だしなみの中でも、化粧に注目する。しかし、彼女らに対する化粧に関する内容における実証的な研究は管見の限り見つからない。そこで、ASD 女性がどのように化粧を位置付けているのかを問いとして設定する。このような問いから、1 つ目に ASD 傾向の高さと化粧頻度の関係がどのように立ち現れているのか、また 2 つ目に彼女らが持つ化粧意識が構築されてきたその背景とプロセスに迫り、現在の彼女たちの生活にどのような状態をもたらしているのかを明らかにすることを目的とした。

3.　研究の方法と結果

本研究は先述している 2 つの目的が達成できるよう、それぞれの研究方法を設定し調査を実施している。

プレ調査では、18 歳から 35 歳の女性を対象に Microsoft 社 Microsoft forms を用いたアンケート調査を実施し、ASD 傾向と化粧頻度の関連を重回帰分析の結果を用いて示すこととした。

当初は化粧が気分昂揚といった効果を持っていることから、精神的抑圧を抱えやすい ASD 女性は化粧頻度が低いのではないかという仮説を立てていた。しかし、ASD 傾向が高い者ほど化粧頻度は高まり、その背景として社会的スキルの欠如が影響を与えていることが明らかになった。社会的スキルの欠如をカバーしようとする社会的カモフラージュが機能しているのではないかと考えた。社会的カモフラージュは先述しているように ASD 女性の精神的抑圧を抱える要因にもなっていることから、化粧が彼女たちにと

って否定的効果をもたらし、生きづらさに繋がっている可能性を踏まえ、次のライフストーリー・インタビューを行うこととした。

本調査ではスクリーニングを Microsoft 社の Microsoft forms を用いて行い、そこで参加協力が得られた 26 名の ASD 女性を対象とした。ここではライフストーリー・インタビューを用いた半構造型のインタビューを通じて、ASD 女性の化粧意識の背景やプロセスを明らかにする。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を分析手法として用いた。

結果として、ASD 女性の化粧意識は以下の 3 グループに分類された。まず 1 つ目の A グループは、化粧をしないことで自己実現を目指す女性である。感覚過敏や金銭的負担、社会的規範への疑問から化粧を避ける傾向がみられた。2 つ目の B グループは化粧をすることで自己実現を目指す女性である。他者からの承認や自己肯定感の向上を目的に化粧を楽しんでいる。3 つ目の C グループは、化粧が社会適応の負担となり、自己実現を阻害される女性である。化粧が自己防衛や社会的カモフラージュの手段となる一方で、精神的負荷を伴う場合が多い。

４．考察

化粧は ASD 女性にとって、自己実現や社会適応に関与する一方で、負担やストレスを引き起こす両面性がある。特に、社会的規範としての化粧が彼女たちにとって精神的抑圧を増大させる可能性があることが明らかになった。その要因として、幼少期からの母親からの言葉や他者との関係性からの影響が化粧意識の形成に大きく寄与していることが示されている。化粧を自分らしく生きていく手段として活用することが可能な ASD 女性にはそれを支えていけるような関わりをすることが求められる。ただ、化粧をすることで精神的抑圧を抱え、社会参加が困難になっている ASD 女性に対しては、その困難さを取り除いていくアプローチが求められる。

また、化粧と社会的カモフラージュは彼女たちにとって類似したプロセス的特性を持つ存在であり、彼女たちの心を守る効果を果たしているともいえる。変えていくべきは彼女たちが心を守らざるを得ない環境であり、介入すべきは彼女たちが抱える困難さである。適切な距離感で化粧と付き合うことができるような生活環境を構築していくことが、社会福祉学が目指す社会的包摂と結束を促進することにも繋がるのではないかと考える。

5. 課題と展望

本研究は、ASD 女性に対して求められている身だしなみ支援の中でも化粧を取り上げてきた。しかし、身だしなみの範囲は髪形や服装など、化粧以外の内容も含まれることから、その他の身だしなみに関する肯定的側面・否定的側面についても検証し、明らかにしていくことが望ましいと考える。

また、プレ調査の調査協力者は 18 歳から 35 歳の女性、本調査の調査協力者は 18 歳から 29 歳の ASD 女性であったため、本研究は協力者の年齢が限定的であった。今後は青年期以外の女児・女性を対象としながら、彼女たちのライフステージに沿った化粧にまつわる困難さ、そしてそれが彼女たちの生活にどのように波及しているのかを読み解いていく必要がある。

ASD という枠組みを取り払って考えると、多くの女性たちにとっても化粧に対する負担意識が生きづらさに結びついていることも考えられるだろう。このような問題の実態を明らかにすることで、すべての人が自分らしく生きていけるようになる社会を構築することが可能になるのではないかと考える。